

Title	英米佛蘭聯合艦隊 幕末海戦記(安藤徳器,大井征共譯)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.2 (1930. 6) ,p.178(350)- 179(351)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つては居ないやうです。尤も何か忌むものはありませうが、之は聞いた事ありません。たゞ、入湯中は、珠數占はするが其他はしない云ふ事は聞いて居りました。

茲まで書いた所、中山氏の高著に就いて思ひ出した事がある。それは氏がよく引用される、菅江眞澄翁の『鰐田濃刈寝』に據る、「羽後國鶴岡町の小岩川に近き厚見邊の村里云々」の項であります。之は古い本からの引用でありますから中山氏の誤ではありませんが、鶴岡市なら羽前國であり、小岩川は鶴岡市から十里程も離れて越後國に近い漁村で、今なら山形縣西田川郡念珠關村大字小岩川といふのです。厚見は小岩川に近い同郡の温海村あつみの事と思ひますが、此の温海村も海邊の温海と温泉の温海とがあつて、前者を單に大字温海といひ俗稱は濱の温海といつて居り後者を大字湯温海といつて居るやうです。一體古書を其儘引用する地名や距離等に於て甚しき誤謬のある事が少くないので、現在私共が其儘を信用して實地踏査をする時は、さんでもない失敗をする事が少くなくもないのであります、で之は叶ぬ事でありませうが、出来るならば此本には此様に載せてあるが、實際は此様であるを訂正した注意書を欄外か末尾にでも記載されてあるならば、獨り私の喜びのみではないかと思はれます。私は此事に就て氣になつて仕様がなないので若いくせに老婆心さと思ひましたが、つい筆が走つたのであります。妄言多謝。五・八・五。(國分剛二)

英米佛蘭 聯合艦隊 幕末海戰記 (安藤徳器 征共譯)

日本史を研究する者にまつて外國側にある日本に關する史料の重要なことは言ふまでもないが、特に對外關係の研究、吉利支丹の研究等にまつては外國側の史料は缺くべからざるものである。中でも非常に複雑を極めてゐる幕末の對外關係に至つては外國側の史料の研究に依らなければ、その真相を明にし得ないものが多くあるであらう。近頃多くの人々が日本關係の外國史料を發見し研究する爲に大なる努力を拂はれてゐることは喜しいことであつて、これに依て日本の史料のみでは知り得ない新事實が發見されるに相違ないこと、思ふ。

本書も又此等の努力の賜の一である。即ち本書は Alfred Rassin の著である *The campagne sur les côtes du Japon* の翻譯であつて、大塚武松氏の序に依れば、氏が久しく書肆を涉獵して得ることが出来なかつたが、龜井一高教授がセーヌ河畔の書店で購入されたものであると言ふ。この著者佛國海軍大主計アルフレッド・ルサンは嘗て實際下關砲擊に従事した人であるのを以て見ても本書の價値如何は知り得るのである。この「日本海岸戰記」のあることは以前より知られては居り少數研究家には利用されてゐるけれども所謂珍籍であり外國語である爲に一般には讀まれなかつたがこの翻譯に依て始めて一般の人々に廣く讀まれることが出来るわけである。

本書は著者が一八六三年(文久三年)横濱に到着して以來、一八

六五年(慶應元年)日本を去るまでの事件を記したものであるが、その記事の中心を爲すものは長州の外艦砲撃、米佛艦の下關砲撃、英國の鹿兒島砲撃、英米佛蘭四國の下關砲撃等であつて、中でも著者の直接従事した下關砲撃については日本側の防長回天史等と共に最も貴重なる史料となるものであらう。其他の記事は此等の事件の起るに至るまでの日本と外國との關係をその始めより簡單に述べたものであり、又當時の日本國內の政情、社會狀態、風俗等を記したものである。一外人である著者の見た此等の日本國情も又我々にまつては非常に興味あるものであつて、その中に幕府の對外方針の變化などを見ることが出来るのであるが、特に幕府から外國使節又は總督等になした種々の談判、依頼、其他の國內の事情に對する談話又は著者の聞いた種々の噂などから、その當時の幕府の苦しい立場をよくうかがふことが出来る。然し此等の記事の中には史實と矛盾する所や、皮相の觀察もないではない。例へば水戸侯を開國を主張する頭となしたり、井伊氏をその反對派で開國尙早論に傾いてゐるらしく記してゐることや、家慶の死と家定の死を混同してゐることや、井伊氏の大老就任をペリー再來以前のこととなし、又長州の勢力を軽く見て結局は幕府に依つて討伐されてしまふと見た點などで、其他所々にかゝることは見られる様であるが此等は外國人としては已むを得ないことであらう。譯者安藤氏は此等の矛盾を考證する爲に、初に文久三年より慶應元年までの大事年表をのせ、又附録として防長回天史、防長史談、薩藩海軍史等より抜萃した史料及び外交文書等二十種をのせ、更にリチャードソンの屍體バリーにある下關の鹵獲砲の二葉の珍ら

彙報

幸田成友氏學位受領について

幸田先生が文部省在外研究員として昭和三年六月九日和蘭國に向け、東京を出發せられた後の事であつた。同年十二月十四日、府下鮫洲川崎屋に於て、三田史學會の有志が會合したる際、偶然にも同席上に於て、來會者の一人から多年義塾史學科のために献身的努力を拂はれた幸田先生に博士になつて頂いたらばといふ發案があつた。來會者一同は言ふ迄もなく之に滿腔の賛意を表したので、その手續は自然余に命ぜられることとなつたがしかし推薦制度なき今日學位論文提出を必要とするので、一應ヘーグの同先生に照會したるに、先生よりは「(前略)その節、諸賢兄から小生を博士に推薦したいと御評議なしたされし由、尙右に付小生に異見なきや、ご御親切の御言葉先以て拜謝いたします。(中略)論文を提出して學位を請求する、これが今の規則か存じます、實際を言へば、之が僕にまつては甚だ心苦しいのです。さう言つては語